会　議　録

会　議　名	平成２１年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　務　局	文化推進係　はけの森美術館		
開催日時	平成２２年３月３０日（火）午後６時から午後８時２０分		
開催場所	はけの森美術館　２階		
出席委員	鉄矢悦朗会長　宮村令子副会長　千村裕子委員　淀井彩子委員 鈴木茂哉委員		
欠席委員	豊岡弘敏委員		
事務局員	薩摩雅登学芸顧問　大野玲学芸員　神津瑛子学芸員　加藤みつこ学芸員補　山田耕太郎主査　天野達彦事務担当		
傍聴の可否	可	傍聴者数	０人
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	１　美術館の運営について (1)　美術館バックヤードの見学について ア　２階スペースの見学と２階利用方法についての意見交換 イ　収納スペース（収蔵庫、２階書庫、２階展示ケース内の引出し）の見学 (2)　展覧会の観覧について (3)　音楽ワークショップ（２／２８開催）の報告について (4)　平成２２年度の予算について (5)　来年度新規採用学芸員（資料担当）の採用について (6)　今年度運営協議会の総括について ２　その他 (1)　入館者数等について (2)　その他		

平成２１年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会会議録

【鉄矢会長】　平成２１年度第３回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催します。よろしくお願いします。

議事に従っていきたいところですけれども、バックヤードの見学と展覧会を見るところを先にしたいと思います。

【大野学芸員】　今回は美術館が会場ということで、先に展覧会をごらんいただいてから、バックヤードをご案内し、それから２階へ。２階の中村富子様の居住スペースが空きましたので、そちらを見ていただいて、ご意見をいただきたいと思います。新たに美術館バックヤードにもなる２階使用方法についてご意見をいただくためにも、現在のバックヤード状況を見ていただいてから、と思います。

では、この展覧会を担当しました神津から、展覧会について簡単に説明をいたします。

【神津学芸員】　ちょうどいい季節、春のお花見ですとか、緑がきれいな時期になりましたので、「自然の歌」ということで、素描を含めた小金井の近辺の風景とか、あと、お庭をかいている作品などを集めています。割とよく花特集をこの時期はしていましたので、今回は自然という形にしてあります。

あと、自然ということにひとくくりにするのも難しいのかもしれないですけど、素描類がたくさんあるのになかなか出せないものも多いので、この中にちょっと静物なんかもあって、あとは向こうの奥に行くと、ちょっと強過ぎて、迫力があり過ぎて出せていない裸婦なんかも１枚は出したりして、ちょっとめりはりをつけて展示をしようかなとやっています。ふだんは会議室でやっている会議なので、せっかくここへ来ているので、ぜひじっくり見ていってほしいと思います。

【千村委員】　花を描くワークショップに参加したときに、これとこれ、かきました。今、大事にしています。

【神津学芸員】　こちらも今、２階に展示しています。それと、この絵はそのままお庭のオーブン・ミトン・カフェが見えるような位置ですし、結構、間違い探しじゃないですけど、お客様のほうからもすごく楽しいという声を聞いたりします。

【大野学芸員】　今、神津から話がありましたけれども、なかなか出す機会がない素描をなるべく紹介していきたいということがあります。素描が紹介しづらい理由に、素描額が足りないというのがあります。いつもパズルのように額と出したい絵の大きさと数を合わせてやっているのですけれども、額購入の予算が少しずつ増えてきましたので、素描額も少しずつ購入して、展示する機会が増えてきました。

【薩摩学芸顧問】　子供が見るのには一番いい施設ですね。ちょっとぜいたく過ぎるけど。

【鉄矢会長】　子ども向けに低く、作品このくらいの高さで全部そろえて展示したり。この美術館ならできそうですね。

【薩摩学芸顧問】　子供がちゃんと入る。子供の目の高さでこういう絵ばかりずらーっと並べて、子供向けのワークショップをやって。その時は大人ががまんしなければ。

【神津学芸員】　やってみたいですね。

【大野学芸員】　そうですね。いつも子供が背伸びしているんだから、たまには大人がしゃがんで見れば。
【鉄矢会長】　子供とか、ワークショップを考えたら、油絵よりも水彩画のほうがいいかもしれません。水彩なら子供たちも、小学校でかいている。その他のアイデアとしては中村研一の油絵の筆揃えというのは、何か比較もおもしろいと思う。ある画家と絵のタッチが全然違うのなら、その人の筆と中村研一の筆を並べて、「ほら、違うじゃない」とわかると興味深い。
【神津学芸員】　筆じゃなくて、パレットは結構、日動画廊さんでしたっけ、ありましたね。パレットばかり集めた、画家のパレットを集めたコーナーか何かをつくったのがあったりして、結構残り方が全然違うからおもしろかったです。
【大野学芸員】　資料として筆が残っているので、企画できるのであれば、してみたい。
【鉄矢会長】　そうすると、このタッチの雰囲気とかがよく使っていたけど、この筆じゃないかという想像をめぐらせる話ができると思います。また、中村風タッチじゃない人の絵を見て、油絵ってこうやって自分で工夫して筆をつくっていくことを示すのもよい。そうすると、子供たちも絵をかくときに、自分で筆をいじっていいんだと思えます。
【大野学芸員】　あと、照明器具も気になるところです。今は当館には２種類あります。こちらは古い照明で、光の輪が何重にか縁に出てしまって、あまりきれいではないです。これは、もともと旧財団美術館時代にあった照明器具を引き継いだもので、今、少しずつ買い足して、こちらのような新しい照明に変えています。ただ、まだ、あと１０本ほどあれば、すべて新しいものでまかなえるのですけれども。少しずつなので、いまはこのように新旧混ざっています。
【神津学芸員】　あと１０灯あれば。
【薩摩学芸顧問】　やっぱり全然違うからね、照明で、ものの見え方がね。
【大野学芸員】　では、ちょっと収蔵庫を見てください。どうぞ、収蔵庫に。当館で収蔵庫というとここだけなんです。ほかには倉庫のようなところに、温湿度管理はあまり気を使わなくていいような陶器類ですとか、そういうものを入れています。油絵に関しては今、全部ここ収蔵庫に入れています。
　今、展示してある作品をしまうともうぱんぱんです。なので、この前もお話ししましたけど、新しく寄贈作品が入ってくるようだとちょっと大変なことになります。それは工夫しなければという感じです。こちらの棚にならんでいますが、額に入っていない絵もまだまだあります。あと、こういうものを置く場所が全然ないんです。
【千村委員】　これはなんですか。
【大野学芸員】　これはカタログや絵はがきの在庫です。美術館は結構こういうのがたくさんあって、どこの美術館も裏に行けばカタログとか、はがきとか、チラシなどが置いてあります。当館の場合は、こういうものをどこにも置く場所がないんです。こちらは梱包や展示作業に使う綿布団ですけれども、こういうものを置く場所が足りないです。
【大野学芸員】　これは温湿度計です。このようにきちんと管理を。収蔵庫の空調機は、修理も重ねて、今のところ、順調に温湿度を管理できています。ほんとうはここにさらに前室があって、例えば撮影とか、絵を調べる作業をしたり、梱包作業したり

できるような、これの半分ぐらいの前室が本来あるべきなんです。そうすれば外の空気もダイレクトに入ってこない。ここはそれがない。でも、最低限のものはしっかりちゃんとされている、立派な収蔵庫です。けれども、今度も実は４月５日に、宗像市から１２点ほど作品を借りに来るんです。それをどこで梱包するのか。コンディションチェックもして持っていかなきゃいけないのに、どこでするのか。もう仕方がないので、休館日の月曜日に来てもらって展示室でやろうと思っています。ちょっとそういう場所がない。

【千村委員】　そういう細かいやりくりが、私たちにはわからないけれども、いろいろなことがあるのね。大変なのね。

【大野学芸員】　そうですね。例えば、もともとここの棚に陶器が入っていたんです。陶器の展示は２階ですから、そのたびごとに持って階段を上がり下がりするのが、怖くて。それで今では、陶器は全て２階書庫に移しました。狭い書庫ですが整理して場所を作りました。

【千村委員】　そういういろいろなことを記録して残していますか。というのは、よく昔のやりくりの様子を後の時代の人が参考にしたり、それを勉強したりしてやっているけど、最初のときのそういう苦労みたいなのがメモとして残されてあれば、とてもこれから先の人にとっても力強いし、今まで頑張ってきた人の努力も、そんなところまで工夫をしていたことを記録されて残していかないとと思います。

【大野学芸員】　はい、そうですね。例えば事務の天野さんも、今年で退職です。

【淀井委員】　そうですか。

【大野学芸員】　だから、そうやって人が常に入れ替わっていくというのは、この美術館の問題……。

【淀井委員】　そうですか。それも何か、なれたところで。

【大野学芸員】　あと、そちらの階段の下にも小さな倉庫があります。例えば電球の予備とか、工具などを入れる小さな倉庫です。

【千村委員】　広く必要なのね。

【大野学芸員】　いろいろなものをしまう場所が。ワークショップをやるには、筆とか、筆洗とか、画板とか、そういうものをしまう場所も必要です。そういう場所がなかったんですけれども、今、２階が少しずつ使えるようになりますので。

【淀井委員】　場所がないですね。

【大野学芸員】　では２階展示室へ。展示は神津が１階の展示内容と一体で構成しています。神津さん、ここの展示でポイントはありますか。

【神津学芸員】　１階に出ているものの中に入っている陶器を出していたりとかですね。あと、このつぼは入っています。あとは、このいすがこの絵のいすです。

【千村委員】　いすが。ほんとうだ。

【神津学芸員】　割と生活と密着していたんだなというのがわかるような。

【大野学芸員】　あと、委員の皆さんに、きょうの議題の関係もあって、ぜひお伝えしたいのが、実はこの引き出しに素描類が入っているんです。ここでは問題があるんですけれど、ここしかないので。素描で紙ですから、温湿度の管理をしっかりしないといけないものです。セキュリティの問題もあります。なので、今後、収蔵庫に入れていかなきゃいけない素描類が、今はここに入っています。

　展示室としては、温湿度管理をきちんとできていれば、それなりに問題ないと思う

んですけれども、そうではない。これは普通のエアコンですので、湿度調整ができないので、湿度が増えたときは除湿器を回しています。
【大野学芸員】　こちらが２階書庫と呼んでいるスペースです。はい、狭いです。
　非常に貴重なのは、中村が存命中の雑誌類ですとか、中村自身の記事が載っている当時の雑誌がたくさんあることです。これは資料としてしっかり管理して、例えば図書資料室のようなものができれば、公開したり、研究者に情報提供する必要があると思います。これがさっきご説明した、下の収蔵庫から上げた陶器です。
　後でご案内しますが、いずれ２階に学芸員室などができるとしたら、ここから出入りできることとなります。展示室を通らないで研究スペースに入ることができます。
【大野学芸員】　では旧居住スペースをご案内します。こちらがエレベーターホールです。１階展示室の一番奥、結界がはってあるところを入っていくとスロープになっていて、エレベーターホールがあります。乗って上がるところです。エレベーターを使うお客様は職員がご案内して、ここからこの応接室を抜けて展示室に。以前は住んでいらっしゃって、ここはそういうふうに使っていいということでしたので、エレベーターには係の者が同乗して１回１回ご案内するという形にしていました。
【千村委員】　北欧に行ったとき、子供が館長さんと美術館の中を回る日が年に一度あったり、お城を市長さんと回ったりというのがすごくみんな楽しみにして、ここも回れるね。
【大野学芸員】　こちらからが完全に住居スペースだったところです。ここが台所、水回りがあるので、今、考えているのは、ここを創作系ワークショップの部屋にすれば、２階の部屋で水を使うワークショップをするときに、いままでのようにバケツで水を運ばなくていいなと。
【大野学芸員】　前、猫がいたので。カーペットや壁が。
【委員】　うん。わかる。引っかいていますね。すごいですね。
【委員】　ひどいですね、それ。
【大野学芸員】　ここは富子夫人の寝室、居室だったところです。
【鉄矢委員長】　これは残したとしても、カーペットは入れ替えるように最低限直せば、コストは低くおさえられます。
【大野学芸員】　それから、お風呂です。こういうものをどうするか。
【薩摩学芸顧問】　これを大改装して、下みたいな大展示室にすることは不可能。１個１個、基本的な区分はいじらずに、用途を考えてつくるとしたらどうでしょう。
【大野学芸員】　じゃ、隣の部屋です。こんな感じです。つくりつけの家具や棚などもあります。いくつかある部屋のなかで、ワークショップや講演会に使う公開スペースと、倉庫や学芸調査室などの関係者以外立ち入り禁止のスペースに、構造上分かれればいいなと思います。こちらは倉庫として作られている部屋です。棚がしっかり、たくさんあります。カタログや展示道具などをしまう場所になる予定で、先ほどご説明したように今までそういう場所がなくて困っていましたので、既に物を移しています。
【神津学芸員】　これがほとんどすべて、さっきの狭い書庫にあったんです。
【大野学芸員】　前は、出すのも入れるのも大変でした。
【鉄矢会長】　このイーゼルは、ワークショップか何かで使うものですか。
【大野学芸員】　そうです。それから、展示器具が、これから展示台とかつくる可能

性もありますし、そういうものを置く場所にしたいです。あと、旧財団美術館の頃は図面上、こちらが学芸員室になっていました。動線としても、そのつもりでつくったスペースだと思いますし、そこが倉庫です。ここをあければ、先ほどの２階書庫、そして展示室です。ここを書庫みたいにしたり、書類とかの棚をつくって、こんな感じです。

【薩摩学芸顧問】　だから、結局、全部、土足で来れるようにしなきゃしようがないんだね。

【鉄矢会長】　そうですね。もちろん。全部、土足のほうがずっと楽ですし。

【薩摩学芸顧問】　さあ、鉄矢先生の出番だな。改装計画。

【大野学芸員】　計画案については、ビジュアル的にわかる伝え方もしていければと思うので、お願いします。

【淀井委員】　図面をよく見なきゃだめですね。でも、楽しみじゃない、これから何かできそうで。

【鉄矢会長】　では、議事次第をご覧ください。

（１）、（２）、バックヤード見学、展覧会の観覧が終わりました。

（３）の音楽ワークショップの報告。

【薩摩学芸顧問】（１）の２階スペースの見学と２階利用方法についての意見交換をやったほうが……。

【鉄矢会長】　２階スペース、２階の利用方法についての意見交換を少しお願いします。原則、部屋の間仕切りを変えるのは多分不可能だろうと思います。内装の床、壁、天井をもう少しきれいにするぐらいなのかなと思ったときに、どういうのが一番適切なのかを考えるべきでしょう。それから、回遊できるということ、こぢんまりした部屋があること。閉め切りの部屋ができるということなどから、展覧会の大きさが変わるものが可能だと思います。ただ、一方で、美術館のバックヤードは確保したい大きさがあると思います。バックヤードとしての必要なボリュームというのを出すべきでしょう。あと、事務方と学芸のところが２つに分かれて、離れたところにあって、運営がうまくいくのかどうか。僕は、その辺がちょっと気になったんですけれども、あと、もう１点は、ほんとうに運営側をやってくれる人と、研究をやる人としっかり分かれたほうがよい。普通は美術館へ行って、学芸員に会うことはほとんどないです。いかがでしょうか。いろいろな意見を自由に。

【大野学芸員】　確かに下の事務室も狭いところに全員がいて、そこで学芸員が調査・研究をするというのは難しい。ただ、だからといって、下に学芸員がいない状況で、事務員だけが下にいて、それでいいのか。オープンして以来のことを考えると、学芸員が窓口のそばにいて、そういったお客様との顔が見える関係で運営してきたところのよさがなくなってしまう。複数の学芸員が出勤しているときや、調査研究しなきゃいけない閉館日とか、そういうときに２階の学芸員室を使ってはと思います。

【鉄矢会長】　今のキーワードは多分、学芸員と顔の見える関係が維持できる美術館、そのあるべきレイアウトとか、リニューアルの方法はあるんじゃないかな。研究の場でありながらも、顔が見えるものというのを、普通の美術館は見せていないけど、こんなところまで見せているんだという形なのかもしれないですし、そんなのがあっても面白いですね。

【淀井委員】　でも、顔が見えると言ったって、見物というか、見に来た人がいつも学芸員さんというんじゃないでしょう。
【鉄矢会長】　そうです。そうじゃない。でも、知っている人がいるから、ちょっと来たとき。
【淀井委員】　ちょっと声をかけたりとか、そういうことはあるかもしれないけど、やっぱり学芸員の部屋というのはちょっと難しいところがありますね。やるべきことがたくさんあるから。持っている資料とか、いろいろありますよね、部屋へ行くと。大きくて、だーっと学芸員はいるんだけど、大変そうだと。研究者の部屋みたいなものだからね。
【鉄矢会長】　あとは、ほんとうに、これからの美術館がどういうふうに求められている姿をつくっていくのか。最近言われている地域コミュニティの核となれとかいう話になってくると、ほんとうにこのフロアが、この部屋なんかがミュージアムサロンみたいな話ができるのか。でも、そのときに一体だれがどういうふうに運営をして、人が集まってきて、さばくのかとかいうのも出てくるでしょう。
【淀井委員】　すてきですけどね、こういう部屋を持っているということは。
【鉄矢会長】　こういう部屋で美術談義ができて、ここから情報発信が生まれて、それが外の何かができるとか、美術館でやることではなくて、市内でいろいろなところでやるアート活動の企画がここで生まれるようなサロンだったら良い。僕はすごく美術館の子供サロンじゃないけど、何とかサロンと、美術館が生み出したサロン的な、いろいろな人が多世代交流をしながら、それこそ野川のワークショップをやりましょうとか、いろいろなことに対して出ていける。
【千村委員】　毎週じゃなくても、第１何曜日は何とかサロンとか、子供サロンとか宣伝して、そういうときにはオープンにしてというようになりますね。
【鉄矢会長】はい。
【神津学芸員】　あとは、何も美術館の玄関で学芸員の顔が見える美術館じゃなくてもいいと思うんです。きょうは大野さんがいるから声をかけてみようとか、来た人が声をかけられるようにするツールがあれば、今の現状だと入り口の顔、ロビーで「こんにちは」と言うようなやりとりをしていると、裏側をものすごく見せるように感じているので、それが、ここがサロンという形であれば、声をかけて、ある学芸員さんとここで輪が広がってということがきっと。そこを断絶しないようにしたいというのは必要かなと。
【鉄矢会長】 あと、玄関が２つあるというのはすごくいいのかなと思っているのは、ある程度閉館ですと閉めて、セキュリティをかけた後、もう少しやるのか。一応責任がしっかり切れる。その後、何か作品の中を全部歩いてからでないと帰れないとかじゃない方法が。あるところできちんとやったら、あとは自分が身の回りだけやれば問題ないというようなストレスがないような、管理側のストレスが。全部つながっていると、僕だったらストレスを感じる。
【事務局天野】　ねじを巻き直していいだろうという意味じゃないんですけど、美術館の居宅部分から、奥様が亡くなられた後、来年の５月まで、少なくとも、来年前半まで展示が計画されているので、実質、改修というのはそれ以降になると思うんです。顧問ともちょっと相談をさせていただいている中では、小金井市の場合ですと、市民が使える場所が非常に少ないというのがあって、こういう場が出ると、うちにも使わ

せろというような声が必ず上がってくると思うんです。運営協議会の今の委員任期が来年７月で終わると思うんですが、市民参加の方の任期は３期まで更新できるので、もう１期お願いして、大規模改修の計画までパッキングできるような方向でいけば、よりいいのかなと。まして建築の専門の先生もいらっしゃるので、それらの意見もいただきながら、予算を要求するまでの中である程度、方向性がきちんとできれば、財政のほうも、きちんとした理由があれば。それらを活用しながら、美術館でこれだけの財産を活用するという方向で、市民の賛同を得られるのではないかと。その辺、いい意味でパッキングしていったほうがいいのかなと思います。

【薩摩学芸顧問】　今の意見に関係することで、改装について考えるための委員会とかワーキンググループをもう一つ、つくるというのは多分、いろいろな意味で無駄だと思うんです。せっかく運営協議会があるわけですから。もう一つつくると言ったら、また、そのために規則をつくって、委員を募集して。それと運営協議会の関係はどうなんだとか。それは無駄手間ですから。運営協議会でこの建物全体をどうするかということの方向性を決めるとした場合には、開館から今までの間、この美術館を委員の立場から見てきた方にもう少し継続していただかないと。ここでがらっと委員を一新すると、それはまたそれで非能率だろうと思うんです。ですから、ちょっとご負担かなとは思いますけれども、原則委員は変えない方向で決めていったほうがいいという形にできれば。皆さん乗りかかった船ですから、よろしくお願いします。

【千村委員】　予算とか、しっかり考えないで、無責任な発言かもしれないんですが、今、２階を回ってきて、私はすごくおもしろかった。内装をきちんとして、絵画なり、美術品を展示するという、もちろんお金をかけてそういうことをできれば、行く行くはそういうふうにしていくんでしょうけれども。それができない間でも、おもしろい建物なので。今大抵はみんな狭いワンルームマンションとかに住んで、ここのように、廊下を回れて、立体的に向こうがわかるなんていうのはすごくおもしろいし。全然違ったおふろが２つもあったり、家事室だってすごくおもしろいなという感じがするんです。だから、建物を見るみたいなワークショップがあっていいんじゃないかと思います。一度に何十人も来ないで、グループにして見せる、建物の遊びみたいな感覚は小さい子供たちに目を開かせるきっかけになるんじゃないかなと思いました。内装をどうかする以前に、この生の建物がおもしろいなと思いましたので、そんな使い方を考えられればいいかなと思います。

【淀井委員】　あまりそこがおもしろくなり過ぎちゃうときっちりした形に進めなくなるかもしれないですね。

【薩摩学芸顧問】　どの部屋をどういうふうに使うかということは結局、この美術館が何をやっていくかということでもあります。そこに関しては、どちらかといえば学芸員側がこういう方向で行きたいんだという、スタンスをまずたてないと。今は、あの部屋のままでいいのか、もしも１つぐらいぶち抜けるならば、大きい部屋にしたほうがいいのか。いずれにせよ、どのように使うかということが明解にならなければ、改装計画は立たないし、どういうふうに使うかということは、単なる思いつきではなくて、この美術館がどういう方向に行くかというマスタープランみたいなものがある程度出てからのことだから、まずは、学芸員側で少し先のことを考えなければならない。同時に、当面、５月１日からはどうします？　１人増えるでしょう、学芸員さん。机とか、そういうのは事務室に入り切らないでしょう。

【大野学芸員】　少しずつでも準備して。
【薩摩学芸顧問】　少しずつ準備するというのは、例えばあそこの部屋を１つ、学芸員の部屋にすると決めたとしても、事務や作業の机など、ぱっと入らないでしょう。
【大野学芸員】　長机のようなものはあるんですが。
【薩摩学芸顧問】　そういうものでとりあえず始めるか。少しずつ、きょうみた事務室のあそこではあまりにも手狭なので、２階を少し使い始めれば。
　それから、あとはこの応接室だろうね。ここをどう使うか。ここはまだこのまま使えるから。それ以外はちょっと手を入れないと。土足でいいと決めれば、まず土足で動けるようになるだけでも、今のカーペットのままで。部屋もそういうふうに使ってみると。内装は変えないけど、１年間は、例えば部屋割は規格のままで、この部屋は展示室にして、でも内装を変えずに中村研一が暮らしていた雰囲気を見せながらやってみる。それで都合がいいのか、都合が悪いのかとか出てくると思います。まずはやってみてもいい部分はあるんだろうなと思います。それが許されるのがあるのかなと。
【大野学芸員】　実際はすぐそこでやっていますので、それをものによってはあっちでやってということも。
【薩摩学芸顧問】　だから、こういうのは非常に大事なことは、マスタープランみたいなものがあって、それに沿った使用計画があって、それに沿った改装計画というのはもちろん大事なんだけれども、その一方で、法的に引っかかったことをやっては困るけれども、ある程度使い始めてみることも必要なんだ。やらないと見えてこないから、少しずつ。特に、ほとんどこうやって使っているわけだから。ただ、いきなりここをサロンみたいに使えるか。毎日、開館時間に開放しますなんてやったら、一体だれが管理するということになるから、例えば週１回ぐらいやってみようとか。だから、きょうは初めて見ていただいて、意見交換して、場合によったら、もう１期引き受けてくださるならば、運協を４回開けるわけでしょう。だから、来年度、早目に、５月とか、そのくらいに開いて少しずつ……。
【事務天野】　おそらく別に、検討委員会に準じたものの予算は、例えば補正を組むとかいうことは可能だと思うんです。ただ、補正を組むのは早くても６月ですので、そうすると、６月の議会に諮るという話になると、少なくとも４月２０日過ぎぐらいに方向性が定まっていないと補正予算の要求というのはなかなか難しいと思うので、そこは館長と相談しながら、美術館側が動きやすいような方向性で動いていったほうがいいんじゃないか。先手、先手のほうがいいと思う。
　例えば企画だとか財政のほうには、補正を組むとか、何とかということもあるんじゃないのぐらいのことは示唆してありますので、筋道が立てばちゃんと受けてくれる感じはする。
【鈴木委員】　今回の３月議会でも、一般質問である議員さんから、美術館の２階について若干質問が出まして、市民部長の答弁では、一応運営協議会のほうでご理解をいただきたいという答弁をしていますので、さっき、学芸顧問がおっしゃったように、新たに活用についての検討委員会を発足させるのは、市民の公募委員を募って活用を考えるとかというような話は、今のところ、出ていませんし、我々もそう考えてはいないということです。
【事務天野】　ちょっと言葉が足りなかったんですけれども、運営協議会の回数が４回、予算化されているんですけど、検討するための予算が必要であれば補正を組むと

か、回数をふやすような。追加を補正予算で要求して、認められれば。
【鉄矢会長】　いつ補正を。
【事務局天野】　先ほど申し上げたように、大体６月が一番早いわけです。そうすると、その中の準備でいうと、遅くても４月の２０日過ぎぐらいから補正の要求があるので、それに載せるように動いたほうがいいのかなと。
【薩摩学芸顧問】　私の１つの提案としては、収集評価委員会に本江さんとか、乙葉さんとか非常に優秀な先生方に入っていただいているので、その先生方を加えた拡大運営協議会みたいなものを年間にあと２回か３回か開けるような補正はとれないかなと。運営協議会は４回でいいと思うんですけれども。
【事務局天野】　それは、とろうと思えばとれるんじゃないか、私が言っていいのかどうかわからないが、生きた予算を使うのであれば、今、先生がおっしゃられるような形でやっていったほうが効率的にはいい。
【薩摩学芸顧問】　私も東京都、国で仕事をしてわかったばかりですけれども、運営協議会を４回、お諮りしたというよりは、拡大の委員会をあと４回開きたいんだというほうが理屈的にはなるような気がします。
　今、収集委員は３人でしょう。ここのことをわかっていらっしゃる方や東京国立近代美術館、東京都美術館にいた学芸員、経験者ですから、そういう拡大協議会みたいなものを設けるというのはあるかもしれないですね。
【鉄矢会長】　結構部屋が使えないんじゃないかなと思うのがこういう家具とか、こういう調度品、捨てられないんだと思うんです。でも、あと二、三十年しないと、みんな見て懐かしいという気分も出てこないものばかりなので。
【薩摩学芸顧問】　そうなんですね、こういうのは。
【鉄矢会長】　だから、これをとにかくどこか一部屋に入れる、学芸員が世代交代して、あと２世代くらい後の学芸員がこんなの見せなかったのか、ばかだなというくらいの感じでいいと思うんです。でも、それまでとっておくのがこの美術館の使命だと思います。だって、これを今、えいやと捨ててくださいと言ったら、だれも捨てられないですね。だから、それは目をつぶる部屋を１個つくって、とにかく捨てられないものはリスト化しながらも、どんどこ押し込んで、二度ともう私たちが生きている間は見ないというぐらいの感覚のものをやっておいたほうが美術館としてはすっきりして、ちゃんとなると思うんです。このまま中途半端に残しておくと動けなくて。
【薩摩学芸顧問】　そう。だから、この部屋を使いこなそうと思ったら、１回、とにかく全部、空にするぐらいの気持ちじゃないとできない。こういうものとか全部。
【鉄矢会長】　ぼろぼろだし、ぼろぼろだから、捨てちゃおうと言って捨てていいのかどうか。でも、それは２世代ぐらい後の学芸員が判断すればいい。
【薩摩学芸顧問】　そうそう。
【鉄矢会長】　今の学芸員が決めるにはちょっとまだ基準がないんだと思うんです。
【淀井委員】　この部屋、なかなか味わい深いですけれども、展示室としては、この位置がいいわけですね。
　いや、すごい壁を立てるという意味じゃなくて、松濤美術館なんかにもソファみたいな部屋がありますよね。それでもちゃんと展示ができるわけだから、これはなくなれば壁が増えるとか、少し白い壁になるとか、いろいろ。小さくても展示室をふやそうと思えば、位置としてはここですね。

【鉄矢会長】　できますね。
【淀井先生】　奥のほうに行くわけにもいかないじゃない。だから……。
【鉄矢会長】　私が思っているのは、ここの回遊廊下をうまく使えば、ここに面しているところが開いたり、閉じたりしながらできるのかな。ただ、さっき言っていた管理、目の届かないようになるというところはどう扱うかなんでしょうね。
【薩摩学芸顧問】　だから、サロンみたいなものに使うんだとしたら、それを前提に作品をちゃんと置いていく。ただ、そのためにも一度物を外さないと。
【大野学芸員】　絵を展示するのではなくて、例えば中村研一の所蔵していた本ですとか、図書資料などをちょっと閲覧できる、そういう形の場所のほうがいいのかも知れない。
【鉄矢会長】　まずはこの部屋の物品を少し移して、ここの積極的な利用を考えたほうがいい。
【薩摩学芸顧問】　これらを取っ払うと、もうどこかにそれを置く部屋は絶対必要だから。そういう部屋は確保する。
【大野学芸員】　今回、ご遺族の方と話したとき難しかったのは、古い家具など含めて備品として寄贈されたのか、遺品として寄贈されたのか、なかには作品としてもあるだろうと。その辺の線引きが難しかった。
【鉄矢会長】　とにかく入れてリスト化するといい。
【大野学芸員】　電話とインターネットが２階に整備されれば、もう２階は学芸員室としても機能する。そういう準備も必要です。
【鉄矢会長】　無線ＬＡＮは届かないのか。有線である程度まで持っていって、無線を飛ばせばいいのでは。
【大野学芸員】　市の情報システムで管理する端末ですので、なかなか簡単にはいかないと思います。
【鉄矢会長】　あとは、絵を展示する場合に、変えなきゃいけないのは照明器具。壁の絵を見せる照明器具の配線工事がどういうふうにできるか。
【淀井委員】　壁面がちょっと少ないですね。もうちょっと欲しいところですけど、仕方ないですね。
【薩摩学芸顧問】　あまり大きな変更はできないと思います。これをつぶして、白い壁にというのはできないと思うんです。
【神津学芸員】　あと、この窓があるだけで、照度がものすごい、明るい部屋部屋なんです。ということは、壁で塞いで窓がなくなるのはもったいない。
【薩摩学芸顧問】　だから、ここはどちらかといったら、絵画よりは工芸品になるかもしれないね。
【鉄矢会長】　ほんとうに常設の中村研一記念ルームがあったっていいわけです。
【薩摩学芸顧問】　あっちにあるイーゼルなんかもこっちへ持ってこれますね。
【大野学芸員】　そうすると、来年度は、閉館の期間を少しずつ延ばして、そういう作業をする時間をとらないと。
【薩摩学芸顧問】　今は完全に２階へ移動してしまうのではなくて、２階にも作業をする、仕事をする場所を確保する。そのうえで、２階へ行ったり、下へ行ったりしながら、それでやってみるしかない。
【鈴木委員】　市長も２階を見たいという話をしておりまして、時間があるときに見

に来ると思うんです。実は、きょうも時間が合えば、皆さんと一緒に見ていただいて、ちょっと意見交換などができればと思っていたんですけれども、ごみ処理の関係で、二枚橋の関係で、きょうは都合が合わないということで来れなかったんですけど、近々、ここを見に来るとは思います。
【鉄矢会長】　じゃ、説明しないといけないな。
【薩摩学芸顧問】　当事者がどうしても……。
【淀井委員】　そう。だから、しっかりと意見をまとめておいていただかないと。
【薩摩学芸顧問】　金かけるなとは言われると思うんですね。
【鉄矢会長】　「学芸員室」、「水場を使ったアートルーム」、「倉庫」、「美術館の倉庫」、それだけでも結構、２階のスペースはいっぱいになってしまいます。また、廊下を歩きながら、建物を見ながら、小さな絵が見れるような照明設備をつくるなどすると、この部屋がうまく使えます。
【薩摩学芸顧問】　そう。この部屋を使いこなせないとね。だから、ほんとうに、まず学芸員室でしょう。それから美術館の倉庫、それからいろいろな備品の倉庫でしょう。それから、水場のあるワークショップをやる部屋。これでもう４つは決まってしまう。それはもうはっきりと決めておいて、１回、たたき台をつくって、それをある程度、例えば次の運協で承認するような形をとって、それで進んでいかないと。
【鉄矢会長】　単純に言うと、絵の具を使えば、どうしたって水が必要なんです。
【薩摩学芸顧問】　要するに絵を描こうと思ったら、水が要るんです。だからキッチンの水まわりがいる。
【千村委員】　市長さんには、そういう技術的な専門性がある学芸員の方が強力な解説というか、それをやらないと、わからない部分が多いと思います。ですから、解説をしながら見学していただかないと、市長さんでいらっしゃるから、強力な意見があるでしょうし。
【薩摩学芸顧問】　だけど、逆にさすがに長いことやられているわけですから、独断で決定ではなくて、それはちゃんとここに任されますよ。
【千村委員】　けれど、堅実な解説をして回って歩くというのはすごく大事でないかなと思います。
【事務局天野】　判断するのには、情報がきちんと入らないと判断できないこともあります。市長に判断していただくためには、きちんとした情報を、あるいは美術館側としてきちんとした要望なりを伝えないと判断してもらえないというのがあるので、そこはきちんと伝える必要性はあると思います。
【鉄矢会長】　はい。そうしていただきたいと思います。
【淀井委員】　美術館、今までも美術館という現実があるわけですから、イメージもちゃんとあるんですけれども、この部屋が増えるとか、奥の部屋を使って学芸員の仕事が充実するとか、そういう全体を考えると、美術館の存在がすばらしくなりますね。だから、今のきちんとしたデータを流すということであれば、学芸員室のスペースとか、そういうことも、ほかの美術館との比較とか、いろいろなことも必要になってくるかもしれないですね、気分だけじゃなくて、データ的な。これぐらいは基本だという部分を言えるようにしておいてください。
【鉄矢会長】　美術館が何を循環させているのか。すぐ人員であるとか、入館数であるとか、お金がどうだという話になるんじゃなくて、この美術館ができて、多分若い

人たちにとってというか、例えば学芸大にとっては、連携してもらってものすごく活力の源をもらっているんです。デザインの学生たちにとっては、新しいものにかかわっていける。そういうものがワークショップを通じていろいろな人に何を循環させているのかという意識を持つと、多分、ここの部屋、このできた部屋というのは、それをさらにパワーアップするんだという意識を持てる。そうすると、美術館のある意味は何なのと言ったときに、美術館というのは、お金は回せないけど、元気は回せるんだよとか、そういう地域の活力として、みんなここで１回、何かをやると、外へ行ってもっと元気になっていろいろな活動ができるとか、そういうイメージを言語化できるといいのかなと。そうすると、最近、はやっている新しい公共とか、その辺のキーワードとくっつけながら、美術館のあるべき姿がどうであるという話ができると強いんだろうなと思うんです。それが出てこないと、何だよ、金食い虫じゃないかよと、ほかの循環が見えなくなる。ちゃんとした循環としても小学生に対してワークショップがどういう循環になっていくのかとか、うまくそれが言語化できていくと、僕はすごくいい美術館だろうと。

【大野学芸員】　小金井市の芸術文化振興計画アートフル・アクションでも、その実行委員の中に美術館学芸員も入っています。アートフル・アクションの中で美術館は何をするんだ、美術館は市の芸術文化資源だという話のときに、こういう場があるというのも、そういうのもあると思うので。

【鉄矢会長】　はい。そうですね。

　では、議事の（３）に入ります。音楽ワークショップの報告をお願いいたします。

【大野学芸員】　お手元の資料の教育普及事業、「展覧会とは別立ての事業」②特別音楽ワークショップ報告書をごらんください。以前の運営協議会で内容はご説明して開催の予告などしていた音楽ワークショップが終了しましたので報告です。定員を１名上回る２１名の方が参加してくださいました。そのうち、未就学児５名、小学生６名ということで、半数ほどは子どもの参加者でした。家族参加も多かったです。

　趣旨については以前にお話しいたしましたので省略します。写真をごらんください。講師の先生が、はけにあるわけだから、流れる水や湧水や足の下にある地下水、それを意識して、水に思いをはせられるような音楽ワークショップをしてほしいという話をしたのを、真っすぐに受けとめてくださいました。水カリンバというオリジナル楽器を作ったのですが、空き缶をつなげて、中に水を入れて動かして音を鳴らします。

　実はこの水は、事前に講師の方がいらしてはけの湧水をくんで、入れてあります。それぞれ自分の好きな紙を巻いたり絵を描いて楽器を仕上げ、その後、みんなで演奏会をしたりですとか、最後に、いろいろな国の民族楽器を紹介しながら、講師の先生がミニコンサートをしてくれました。はけの水が野川に注いで、海に注いで、海を渡って世界の国にいって、また帰ってくるというようなストーリーのコンサートです。はけの水を表現するところで、参加者たちは自分の作った楽器を演奏する、参加型コンサートです。最後にもう一度、はけに聞かせてあげようということで、はけの森に出て、湧水の周りで演奏会をして終わりました。

　全体としてはとても楽しんでいただけた、いいワークショップになったんじゃないかなと思います。

【神津学芸員】　夕方、森で演奏会しているときに、オーブンミトンのシェフが水琴窟が何であんなにたくさん鳴っているのかと、出ていらして。（笑）

【大野学芸員】　そうなんです。事前に講師の方が見学にいらして、水琴窟があるのをごらんになって、その音とかのイメージもそ入っているので、その通りなんです。コンサートの中でも「水琴窟」という題の新曲を演奏してくださったりしました。シェフも、きょうは水琴窟が、何だろうと。
【大野学芸員】　これは、展覧会とは別立ての事業のワークショップなんですけれども、来年度も２回やる予算がついています。今年度は音楽と演劇でしたけれども、それに限らず、ただ、美術だけではない、広くアートにかかわるようなものを来年度も企画したいと思います。
【鉄矢会長】　何かそのシリーズ名が欲しいなと思ったんですけれども、頭に。アートフルじゃないけれども、何かはけの森美術館のアート何とかというので、第何年度のこれであるとか、どうもこのままだと展覧会とは別立て事業ということで、美術館で展覧会じゃないことなんだと。第三者が報告書を見たときは、はけの森美術館の展覧会とは別立て事業を､音楽をやっているんだ､へええで終わっちゃうんだけれども、そうじゃなくて、はけの森美術館としては、アートの一環としてこれを入れたという感覚をもう少しわかる表現にお願いできると。
【薩摩学芸顧問】　何かつければいい。
【鉄矢会長】　そうすると、多分ほかのいろいろな江戸野菜のスタンプの展覧会も別立て事業じゃなくて、あれもアートであるという話で、みんなアートであるという意識を持ってやっていらっしゃる話なので、そこのところが大切では。
【薩摩学芸顧問】　何か簡単なあれが。別にアートとつかなくてもいいから。今は、上野へ行ってずっと１０年近く、芸大の多分買い上げになった人の作品を、最初は買い上げ何とか展なんて言ったんだけど、あまりにもやぼったいので、これから社会に飛び出していく若い人たちというので、スプリングボードという名前をつけて、スプリングボードワン、ツー、スリー、フォーと、今は１０になっている。
【鉄矢会長】　ぜひお願いします。
　では（４）の２２年度予算について。
【事務局天野】　前回のときはまだ内示をされた段階の話をしたんですけれども、議会が終わって、うちは修正が入らなかったことを報告します。
【鉄矢会長】　わかりました。では、それで。ありがとうございます。
　では、（５）来年度新規学芸員（資料担当）の採用について。
【大野学芸員】　以前もご報告しましたように、所蔵品目録を出版、発行することを念頭に、まずは美術館の作品台帳を整えて、それをデータベース化するという仕事を主に担当していただく資料担当の学芸員を１名、募集しました。その選考が済みました。
【鉄矢会長】　４月になると、それが発表になるわけですね。
【大野学芸員】　その人が作業するためにも、学芸員室が必要だったりしてくると思います。
　　最後の（６）に行く前。資料の多摩ミュージアム・ネットワーク構想研究会企画書をご覧ください。こちらは、以前に少しご報告したことがあるんですけれども、多摩地域でアート系のミュージアムのネットワークをつくっていかないか、まずは研究会を始めようということで、町田市国際版画美術館が幹事館になって始まった研究会です。当館にも呼びかけがありまして、研究会に参加したり、調査アンケートに答え

る形で研究活動に参加しています。

２枚目にあるものが１回目の研究会のときに名乗りを上げた７館のリストです。この時点では、当館はまだ入っていません。まずアンケート調査をしようということで、その対象館として当館が入っています。それが３枚目です。１４館あります。現在ではこちらの１４館がほとんど何らかの形で参加したいと参加表明をしています。

１年目が終わりまして、２年目はどうするか、先日の第４回研究会で話し合われ、私も参加してきました。助成金をとって研究会を進めていくということで、申請なんかをする幹事館は引き続き町田市で、ということです。それがお配りした「多摩・島しょ広域連携活動助成金に係る事業計画書」です。例えば構成自治体等というところがありますけれども、ここに参加自治体として、小金井市と入っている。形としてはそういうふうになります。

こういう美術館の今後の事業展開ですとか、運営自体について、学芸員として研究する場として多摩ミュージアム・ネットワーク構想研究会というところに参加しておりますというご報告です。

【委員】　お金はかからないんですか。

【大野学芸員】　かかりません。これは助成金をとっていますので。当館、小金井市のほうで予算が必要なものではないです。それから、これは丹青研究所に研究委託して進めています。今年度の成果としては、報告書が出ます。あと、成果の一つとして、「多摩ミュージアム・ネットワークマップ」というのが出ます。

【鉄矢会長】　このミュージアム・ネットワークの展開、持続が助成金でなくなる方法を考えないといけないですね。この間、写真美術館へ行って、写真美術館の協賛とか、特別協賛みたいなのをずっと見ていて、多摩にいろいろな企業があるんだとすると、ミュージアム・ネットワークという中でやるんだとすると、そこも、そういうものを考えながらの部分を研究会の中で持っていないと助成金がつかなくなったら、さようならになりそうな感じがちょっとするので、上手に持続可能な取り組みになってほしい。

【大野学芸員】　複数の自治体が参加しているというのも難しいかと思います。例えば港区ミュージアムネットワークですと、港区だけで港区の予算でやっています。

【鈴木委員】　多摩・島しょの市長会です。小金井市からの持ち出しというのは全くないです。連携しないと出ない助成金です。

【鉄矢会長】　私の知っているＮＰＯのフジの森、檜原村のところもこれをとっていたりしています。どこにあるのかは知らないです。

【大野学芸員】　府中美術館だとか、吉祥寺美術館、そこに書いてありますいろいろな美術館の方と直接会って話をする機会が定期的にあるのはとても重要だと思います。その報告書では、各美術館の職員構成など調査結果が出る予定で、それこそ常勤学芸員ゼロ、常勤事務職員ゼロと並んでいるのはどれぐらいあるのかとか、敷地面積のなかで学芸部門や教育普及部門にあてる割合はどうかとか、同じ規模の美術館が予算でどういう職員体系でやっているのかというのが、ばーっと一覧表で出てくる。そういう研究報告書でもあります。

【鉄矢会長】　これだけの緑をバックに持っているとか、ちゃんと緑の中にオーブンミトンみたいなものを入れちゃっているとか、おもしろいところもちゃんと注目して、ぜひひけらかしていただけると。美術館という枠でいうと敷地はこれしかないようだ

けれども、そうじゃないよという話で、それが市として持っているから、こういう連携ができるんだとか、そんなおもしろさもぜひ発信していただけるとおもしろいのかなと思っています。
【鉄矢会長】　次、（６）今年度の運営協議会の総括。先に鉄矢から、その後、順番で、最後、副委員長のほうで締めていただきます。
【鉄矢会長】　今年度の運営協議会の一番、私が気にしていたのは、運営協議会のメンバーが交代していく中で、どうやって持続可能なスタイルをとりながら、どこで予算チェックをして、どういうふうに活動を応援していくこと。それから、応援することもそうだし、我々はチェックもしなきゃいけない。その部分のタイミングをどうつくるかということで、年度初めぐらいに４回やろうというのが今年は３回しかできなかった。これは反省点でもあるけれども、無理があったのかもしれないというのも考えています。
　それで、ぜひ来年度、またそのタイミングでやってみようという意識を持って、でも、無理であるなら、無理をせずに、そこで定例でできるものと、どういうふうなタイミングでチェックをすべきなのか。議会との関係がずっと続くのが市の美術館の運命ですから、その中で美術館自体が年度をまたいで展覧会をやるというシステムをやっとつくって、少し年度初めのばたばた感をなくすとか、そういうことをどんどんやっているのと同じで、運営協議会のほうも、どういうタイミングで予算とか、企画を聞かせていただいて、それに対して意見を言えたりするのとか、予算に関してはどういうところで安心させていただけるのかとか、そういうところをできるようになったのかなと思っています。それの一歩が始まったと思っていますので、まだ１年目で、それがうまく動かない部分がありますけれども、来年またそんな意味では、そこの仕組みはしっかりつくっていかなきゃいけない時期なのかなと思っています。
【千村委員】　市民公募でかかわって、先生方と違って力不足で、あまり役に立たなくて、２期やって、３期はもう辞退したほうがいいかななんて思っていたところです。大変最初は不安な感じのスタートでしたが、最近はいろいろな問題点があって、学芸員の方もかわったり、いろいろ手薄だったりしたことはあったにしろ、とても企画がユニークで楽しいものが続いて、ほんとうに若い人の発想とかはすごいなと感心し、しかも地域の子供たちが今、参加したりして、はけの森美術館というものの知名度が子供たちの中に浸透してきて、こういう形でこれから先、進んでいくと思うと、すごく頼もしいという感じがしました。
　それで、今また、この美術館自体がこのように、スペースがどのようになっていくかということがまた大きな仕事になって、皆さん、担当の方々が苦労されることと思いますけれど、また、それなりに先が開けて見えてくるみたいで、とても楽しい、ユニークな小金井の美術館になっていくんじゃないかという期待を持ちました。
　いろいろなイベントに全部参加したいと思いましたが、なかなか日程とかの関係で、特に私は親の介護というものが遠距離であって、月のうち大分遠距離に旅をしなくちゃならない羽目になって、全部のイベントに出れなかったので、報告書を見ながら、出たかったな、行きたかったななんて思っているのですが、できれば今度、来年度は、できるだけ展覧会はみんな見るように心がけたい。来るたびに楽しく、新しい企画で、いつも子供を引き連れてきますけれども、楽しませていただいたので、自分は力不足でしたが、皆さんの力がすばらしかったということで、私のコメントとさせていただ

きます。
【淀井委員】 私もあまり役に立たなかったとは思いますが、こういう会合のときに、そのときに初めて考えるような状態で、常日ごろから毎日考えているわけでないので、戻ってしまったり、聞いていなかったりするんですけど、それでも全体的な印象では、すごく活性化されたというか、いい方向に元気よく行っているなと思って感心しています。おもしろくなってきましたね、私たち外部の人間も。
それで、小金井市に美術館ということでも、最初は、規模が小さいなという印象だったんですけど、だんだんと活動が器よりも生き生きとして、今回、スペースも広がるということで、実質ともに器も働きも一致して、小金井の美術館として誇れるような方向になってきているんじゃないかなと思います。
私も随分長くは住んでいるんですけど、小金井の美術的、文化的なものというのはなかなか挙げにくいので、美術館というのはその代表ですから、言葉としても美術館があるということはとてもいいですね、具体的で。その内容がまた充実していれば、もっと誇らしく語れますし、とてもこういうものを持てたことが小金井市としてもいいと思うんです。言葉がなかなか出ませんけれども、私は感心しています。きょう、こちらのスペースを見せていただいて、いよいよおもしろくなりそうだなと期待していますので、どうぞ学芸員の方も頑張ってください。
【宮村副会長】 じゃ、すいません。最後なんですけれども、私も市民公募で入りまして、ほんとうに軽い気持ちで入ったら、ものすごく専門的な感じで、私も話に追いついていけなくて、最初はほんとうに２期目でもうおりたほうがいいかなと思ったぐらい、自分はどこまで役に立てるかなという部分があったんですけど、今、３期目というお話もあったんですが、とにかく私としては、学芸員さんや運営する方たちがよりよく、この美術館が地域の人のためにまた発展していけるように応援する気持ちで続けたいなと今、思っています。
あと、市民の１人として、最初、大変だった中、学芸員さんの方が一つ一つ苦労して、こつこつやってきた成果がこの間の企画展も、ガラス絵展も自分が来たときにとてもにぎわっていました。帰った方の中にちょうど私が出たとき、来てよかったと、多分遠くから来た方だと思うんですけど、そういう声を聞くと自分もうれしくなって、いい感じに発展してきているんじゃないかなと思いました。
きょう、初めてこの中を拝見させていただいて、広くてびっくりしたんですけれども、これからどういうふうに運営していくんだろうと思う半面、これから、きっとまた新しいはけの森美術館が広がっていくんだなととても楽しみな気持ちもあります。ほんとうにいろいろご苦労があるかと思うんですけれども、陰ながら応援していますので、頑張って運営していただければと思います。
あと、私事なんですけれども、いいですか。最近、自分が空間の香りの演出を少々学んでいて、今ちょっと勉強をしているんですけれども、その中で、香りでいろいろな演出ができるということを知って、美術館の作品も展示してあるところは無理だと思うんですけれども、エントランスとか、そういうところで、もしお客様が喜んでくれるような香りの演出とかもできたら楽しいなと思いながら勉強していました。もし何か参考になればと思いまして、発言しました。
以上です。ありがとうございました。
【鈴木委員】 １年前、異動してまいりまして、ほんとうに皆様には、はけの森美術

館の発展のために貴重なご意見をいただきまして感謝しております。美術館スタッフ、非常に厳しい環境の中、努力をしていただいて、また、創意工夫を重ねるなかで、市民の方に親しまれる企画ですとか、ワークショップ、イベント等を開催しまして、議会などからも一定の評価をいただいているところでございます。また、今後につきましても、２階の活用ですとか、新たな課題も出てきておりますので、一つ一つ、前進して、より一層、市民の皆様に親しまれる美術館にしていければいいなと考えておるところでございます。１年間、委員の皆様には大変ありがとうございました。

【鉄矢会長】以上が運営協議会の総括ということにかえさせていただいてよろしいでしょうか。では、議事内容の大きなその他。入館数等について。

【大野学芸員】　３月２日に今の展覧会がオープンしまして、２８日までの統計でいきますと総計で４９８、約５００名の方が来てくださっています。単純に２６で割っても、休館日もありますから、考えれば１日３０人来てくださっています。詳しくはまた展覧会が終わった後にします。

【鉄矢会長】　では、その他で。

【事務局天野】　前回の議事録の校正ということで郵送させていただいたんですが。

【鉄矢会長】　ございますか。

【事務局天野】　そちら、今日提出してください。以上です。

【鉄矢会長】　では、以上で。

【鈴木委員】　では、最後によろしいですか。今年度、３月３１日をもちまして、はけの森美術館の再任用職員として３年間、ご活躍をいただきましたが、天野が任期満了ということで退任をいたします。また、学芸員補として約１年間、支えていただきました加藤みつこが同じく任期満了という形で３月末いっぱいで美術館を退職されるということになっております。

　では、天野さんのほうから、ご挨拶をいただけますか。

【事務局天野】　１９年の４月１日から明日までということで、丸３年間、大変お世話になりました。ありがとうございました。

　全く畑違いで、３年間、過ごさせていただいたんですけれども、自分の気持ちの中では、学芸以外の仕事は全部、事務方かなというようなことで、学芸員以外の仕事は全部、事務方が支えていかないといけないのではないかというような思いでやってきました。予算の関係も、こんな予算でよくやれるなというのが初年度、私の感じでした。２０年度、２１年度、それから来年度、２２年度、もうこれの予算も足りない、これも足りないというようなことで、レクチャーを受けながら、必要なものは財政のほうに要求して、要求するに当たって、当然、要求する以上は満額とりたいというのがあったものですから、財政にうんと言われるようなストーリーを私なりにつくったつもりでいます。ですから、先ほど市長に、あるいは館長もそうなんですけど、きちんとした情報を伝えないと、トップとしては判断ができないと私は現職時代に感じていましたので、一応、今の館長の前の館長のときから、情報はきちんと流していたつもりです。ほんとうに長かったようで、非常にあっと言う間の３年間でございました。まだまだ不十分なところで、学芸員さんに、あるいは周囲の人にもいろいろ迷惑をかけたことはあると思いますけれども、私としては非常にやりがいのある３年間でした。ありがとうございました。

【加藤学芸員補】　７月からという短い間だったんですけれども、とても勉強になり

ました。あと、最後に一言、ちょっと私からの意見なんですけれども、皆さん、学芸員に対する要求というのはいっぱいあると思うんですけれども、ちょっといっぱいいっぱいだと思いました。非常勤としてやっていくにはちょっと限界があるなというのを感じながら、私も働いていまして、ぜひ常勤職員をという願いが最後に一言です。

以上です。ありがとうございました。

【鉄矢会長】　鈴木さんも終わりなんですね、文化推進係長。

【鈴木委員】　ええ。それで、きょうは引継ぎ事務の関係で来れなかったのですが、文化推進係長をしておりました鈴木雅子があすで定年退職を迎えまして。ぜひ皆様によろしくお伝えくださいとのことでございました。

【薩摩学芸顧問】　ですから、２階などハードがこう変わってくる中で、友の会組織とか、ボランティア、そういうものをそろそろ立ち上げる時期だよね。それを、職員として関係した方々がまた集まれるような。美術館というところは作品を中心に動いているんだけど、とにかく人が集まって、人の輪ができないと活性化しないので、そこからまたいろいろなものが出てくるので、そういう意味では、短い時間だったとしても、ここで一生懸命仕事をやってくださった方々、ＯＢ、ＯＧの方々とうまくコンタクトがつけられるような、そういう形についても、考えましょう。

【鉄矢会長】　では、第３回の小金井市はけの森美術館の運営協議会を終了させていただきます。ありがとうございました。

――　了　――